

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

日本人の異文化対応コミュニケーションへの積極的  
態度を育てる授業開発に関する研究  
—第二外国語(スペイン語)の主体的問題解決学習の提  
案—

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Shiota, Sayaka メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1865">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1865</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



## 要旨

本研究は、異文化の中で自分の意見を、自信を持って外国語で伝えようとする日本人を育てるために、大学で第二外国語を指導する場でいかなる改善が求められているかを検討し、現状を打破する新しい指導法とそれに対応した教材の開発をおこなうことを目的とするものである。日本人の外国語使用の際に見られる「消極性」に焦点を当て、「積極的に外国語で表現しようとする態度を育てる指導法」を導き出したいと考える。本研究では、スペイン語を指導する際のモデルを示す。

具体的には、修士課程で提案した「大学 2 年生用の問題解決タスクをとおしたコミュニケーション能力を高めるスペイン語の授業」を約 1 年間実践し、その結果分析より、成果と課題を示す。また、その実態から、前段階となる大学 1 年次の指導計画、教材観、評価について考察し、大学 1 年次と 2 年次の 2 年間分の一体化指導モデル(図 52 参照)の提案をおこなう。取り上げるテーマは、「スペインへの旅行」とし、問題解決場面を 1 年次から扱うこととする。

大学 2 年生を対象とした実践をとおして、事前にしっかりと言語材料習得の時間を確保していても、決まり切った表現でなければ言語活動に反映されにくいことが分かった。それは、問題解決において言語による表現のみならず、予想外の相手の反応や要求にも対応しなければならないという現実があったためであると考えられる。また、「言語材料習得」の時間の実態からは、学習者は、その時間に学習していることにこだわり、正確に一文で言おうとするが、どうしてもうまく表現できず、その結果、自信を失うという悪循環が生まれていた。そのため、「言語材料習得」を「言語活動」と切り離して扱うという方法から、「言語活動の中で必要とされる言語材料を学習者が主体的に習得しようとする」方法が求められていると考えるに至った。

それは、大学 1 年次から「言語活動」をとおして初めから問題解決に取り組むものであり、「とにかく主張しなければ問題は解決しない」、つまり、「積極的に働きかけることこそが日本人には強く求められている」という現実に気づいてもらいたいと願うものである。そこで、内容としては、日本と外国(スペイン)間の異文化間ギャップを扱い、カルチャーショックを伴う問題を解決させる場面を設定する。それらの問題解決のために必要な言語材料は、学習者自身に考えさせ、主体的に学習しなければならない機会を設けることとした。その際、教師が「教える」という形態をとらず、また、「教材」も使用しない。それに代えて、今回「スペイン語問題解決マニュアル」と呼ばれる「学習材」を作成し、タスクに取り組むなかでそれを使用させることにする。そのような手法で、1 年次に考える力と積極性を養い、2 年次での言語活動を継続していくことにより、間違いを恐れず積極的に発言しようとする自信を身につけていくことができるようになる。

本論文は10章から成り、本提案に至るまでの経緯を時系列に述べたものである。本提案の中核となる構想および具体については第6章、第7章、第9章の3章で述べる。

第1章では、本提案の原案である修士課程における最初の指導法を構想する際に、日本の大学生を対象に調査し、明らかとなったスペイン語学習の動機やその使用、また、留学した日本人学生が現地で感じた日本人学習者の特徴などについて紹介する。

第2章では、第1章の調査をもとに修士課程で開発した、言語材料習得と言語活動を一体化させ、問題解決場面に対応するタスクに取り組ませる第二外国語としてのスペイン語指導法について述べる。その際、指導計画、教材、評価計画の3点についてそれぞれ詳しく記す。

第3章では、第2章で述べた言語材料習得と言語活動を一体化させたスペイン語指導を、実際に第二外国語としてスペイン語を学ぶ大学2年生を対象に試行した際の活動の発話記録やアンケート調査結果などを述べる。また、その分析から導き出された課題を明らかにする。

第4章では、第3章で述べた被験者の学生の言語活動を観察して見えてきた外国語でのコミュニケーションへの消極性について、日本人の特徴という大きな枠組みで捉え、文化的な背景を見た。さらに、文部科学省の学習指導要領に掲げられている近年の学習目標の変遷より、日本における教育上の課題を把握するとともに、外国語教育における積極的態度を育成する取り組みについて考察する。

第5章では、英語教育の現場におけるコミュニケーションへの積極的態度の育成の実態を把握すべく、公立中学校および高等学校の教員に協力を仰ぎ、授業において生徒が自己表現する機会の与え方やその内容などについてアンケート調査をおこなった。また、その同じ内容について、生徒だった頃の実態を振り返り、大学生、短期大学生、専門学校生にもアンケートに答えてもらった。その結果および分析をおこなう。さらに、全国的に教育現場における表現力育成の実態をさぐるため、公立高等学校および国立大学の入試問題を26年分分析した。その結果として明らかとなった自由英作文の出題傾向および文部科学省の学習指導要領改訂との関わりについても記す。

第6章では、第2章以降第5章までで明らかとなった日本における外国語教育の実態や傾向を踏まえ、第9章(結論)の詳細となる、第二外国語(スペイン語)教育の立場から開発した新たな指導法の構想を述べる。「主体的問題解決学習」と名づけ、ここでは、最終的な提案に至るまでの考え方を記す。指導計画や「着想時の学習材」、評価計画を、大学1年次および2年についてそれぞれ紹介する。

第7章では、まず、その「主体的問題解決学習」の原案段階において実際に大学生に試行した際の結果および分析を述べる。また、その試行をとおして見つかった課題より生まれた「新たな学習材」の構想も記す。

第 8 章では、ある程度形になった学習材を使用し、「主体的問題解決学習」の実践を、大学生を対象に 3 度おこなった際の成果と課題、また、教師側の感触を述べる。

第 9 章では、結論として、また、第 6 章の構想の具体として、本提案である第二外国語(スペイン語)としての「主体的問題解決学習」を提案する。大学 1 年次、2 年次それぞれの指導計画、「スペイン語問題解決マニュアル」と名づけた学習材、評価計画のあり方や使い方を例とともに述べる。

第 10 章は、今後の課題として本提案の実践について今後の展望および期待することを記す。

また、すべての章末には、それぞれのまとめを記した。さらに、資料として、アンケート調査で使用した質問紙、抜粋した公立高等学校および国立大学の入試問題の英作文問題を掲載する。

本提案の「学習材」である『問題解決マニュアル(スペイン語)』を別冊にて付録する。